

リューベック (Lübeck) ドイツ連邦共和国シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州 人口 22 万人



トラヴェ川に挟まれた中州の街、リューベック旧市街を俯瞰(Bird's eye) 左方向が川下で方位は真北になる。

私が初めてこの街を訪れたのは、1977年の夏8月、北欧から初めてドイツに入った時だった。憧れのドイツに到着したその最初の日に、この街を訪ねたのだった。駅前に出ると、ホテルの看板を下げた所に大柄な初老の紳士が立っていた。部屋があるかと尋ねると、彼はうなずいた。私はその『バーンホフ(駅)ホテル』に荷を解き、歩いて程ない中洲の上に造られた旧市街へ入って行った。



写真1 ホルシュテン門と右に塩の倉庫

双塔のホルシュテン(Holsten)門は、15世

紀以来この街の入り口に立ち、今もなお長旅に疲れた人々を温かく出迎えてくれる。塔屋に昇ると、そこは町の博物館となっており、中世のリューベック市街が、模型となって展示してある。13世紀当時、人口2万を擁し、アルプス以北ではロンドン・ケルン・パリに次ぐ大都市であったという。リューベックは北海・バルト海沿岸中心の『ハンザ同盟』の盟主として知られた。門の手前右側、川に沿って立ち並ぶ倉庫は、その昔、上流のリューネブルク(Lüneburg)からもたらされた塩を、遠く北欧やロシアに運ぶため貯蔵していた倉庫であった。今は商店や住宅になっている。

橋を渡り緩やかな上り坂を進むと、左手に視野が開け、市の立つマルクト広場(Markt Platz)、レンガ壁にこの地方特産の黒御影石のアクセントを配した市役所(Rathaus)、その奥に聖マリア教会(St. Marien Kirche)と、中世の面影を色濃く残す町の中心地区が現

れる。巨大なレンガ壁のマリア教会は、その尖塔が高さ120m近くもあり、頂上部は角錐をなし青銅で葺かれている。『ゴシックの街』＝リュールベックの中でもひととき高く、辺りを睥睨(へいげい)してそびえている。それはあたかも中世市民の精神的支柱であったかのごとく、伝統をにじませた重厚な建物である。17世紀の末頃、この中に収められたパイプオルガンで、音楽家ブックステフデ(Dietrich Buxtehude)は、数々のオルガン曲を作り、演奏した。娯楽の少なかった当時、彼の開いた『夕べの音楽(Abend Muzik)』は大勢の市民を魅了し、盛時には警備人が出るほどだったという。当時南のザクセン地方(Sachsen)にいたバッハ(J. S. Bach)もこれを聞きにはるばるやって来たという。

教会の北側には、この街で生まれた作家トマス＝マン(Thomas Mann)の生家、ブッデンブローク・ハウス(Buddenbrookhaus)がそのファサードだけを残して立っている。マンの自伝的小説は、この町を背景にして書かれた。中洲を取り囲む運河は、『トーニオ・クレーガー』の中で、トーニオが友人ハンス＝ハンゼンと歩いたあの「港の運河」である。中洲は南北に長いが、北側に足を進めると数百メートル行った所に聖ヤコブ教会(St. Jacobi)そして聖霊医療院(Heiligen Geist Hospital)とが、はす向かいに立っている。この医療院は今では古色蒼然としたたんなる歴史的建物に過ぎないが、中世においては市民の共同体として成立した都市リュールベックの、自由と自治のシンボルだったものだ。即ち市民権を有する者であれば誰でも、ここで貴重な医療の機会を授かることが出来たのだ。

道を取って返し、町の南側に足を運ぶ。聖

ペトリ教会(St. Petri)を横に見て先へ進むと、中洲の南端には、大聖堂(Dom)がそびえ立つ。その手前を東側に入った所に聖アンナ博物館(St. Annen Museum)があった。かつてはアウグスティン派の女子修道院だった所で、今は改造してそのまま郷土館となっている。内部のゴシック彫刻に飾られたホールに目を奪われたが、ポスターを見ると今晚ここで室内楽のコンサートがあるという。よしと決めて案内所で切符を買い、そこの老婆に開演時間を聞いて一旦宿に帰ることにした。

暫くして、一張羅(いっちょうら)のスーツに着替えて夕闇迫る街に飛び出した。ホテルに戻って来る前、通りで見かけた中華レストランに入りたくなった。入って焼きそばを注文すると、これがシナモンのような強い香りのする得体の知れない食べ物だった。それでも空腹の身には大変なごちそうで、食すのに抵抗はなかった。最中に日本人の中年男性が入って来て、相席となった。歴史の研究者だという。私の服装を見て、同業者と間違えたいらしい。これからコンサートに行くためにスーツを着込んでいると説明したら、ようやく納得してくれた。それにしても歴史の研究者がこの街に来ているというのも、いかにも！ではないか。それほどこの街は歴史の重みを背負って来たのだ。

コンサート・ホールは既に聴衆で満たされていた。意外なことに老若男女いずれもふだん着のままだった。正装で異邦人の私は目立たぬよう隅の方に席を見つけ、しばしバロックやブラームスの曲に聴き入った。何とも悦にいった晩だった。



写真2 リューベック大聖堂 (Dom)

翌朝、コーヒーとパンという簡単な食事を済ますと、再びこの界隈に足を運んだ。大聖堂の尖塔もまたマリア教会のそれに劣らぬ偉容を誇っている。それが遠望できる南側の大きな池越しに眺めて見ると、歳月の重みのせいか幾分傾いていることが分かる。これもまた、町の魅力の一つになっているのだという。池の周りは市民の公園になっている。ひっそりとしていたが、一人老婆が池の白鳥に餌を与えていた。8月とはいえ鉛色のどんよりとした雲が空を覆い、朝の冷気は膚をさす。私はこの緑深い公園で、しばし「遠くに来たなあ」という思いに浸っていた。昼前に宿を発ち、列車でハンブルクへと向かった。

数年の歳月が流れ再びリューベックの石畳を踏んだのは、85年のやはり夏8月だった。ハンブルクからの列車を降り、駅前に出ると、その日もあの『バーンホフホテル』の老支配人が立っていたが、残念ながら部屋はないという。仕方なく重い荷を背負ったまま旧市街へと足を向け、北側の運河沿いの通りに面した殺風景な貸し部屋に宿をとった。町に出てみると、落ち着いた古都のたたずまいは変わっていなかったが、この時は一つだけ、イタリア系の人々が移り住みピッツェリアを開いているのが目についた。中心街の通りで、

日本の青年らしい人物に声をかけた。意外にも韓国からの留学生だった。互いに分断国家（ドイツも東西に別れていた）ゆえに韓国とドイツは交流が深い。しかしこんな北の町にも来ているとは驚いた。この春からヴィオラを習いに来ているという。いかにも音楽でもエピソードを持つこの町ならではの出会いだった。



写真3 聖マリア教会 (St. Marien)

翌朝再び訪れたマリア教会の内部にはギャラリーが設けられ、戦時中の1942年3月28日から翌日にかけて行われたイギリス軍によるリューベック大空襲のパネルが展示されていた。尖塔が被弾し焼け落ちた跡や、多くのレンガ材が聖堂内へ落下したことなどが当時の写真によって明らかにされていた。その年は先の大戦が終わって40年目の節目に当たる年だった。5月には、ヴァイツゼッカー大統領の戦争責任をめぐる演説が連邦議会で行われたばかりだった。南独のニュルンベルク (Nürnberg) でもドイツ社会民主党の『二度と再び(Nie Wieder)!』というポスターにお目にかかった。そこには跡形もない瓦礫の市街の写真が載っていたが、このニュルンベルクと同じくリューベックの市民は戦後瓦礫の上にこの街を、そしてこのマリア教会を再建して来た。南側のペトリ教会など

は今なお歳月ゆえの傷みと、戦争の傷とをともに修復していた。先を急ぐ旅のため、再びリュウベックを後にした。この時は、ローカル線に乗りロマンチックな田園風景が広がるメルン(Mölln)の町を通り、この地の大河エルベ(Elbe)を渡ってリュウネブルクの町へと抜けた。

三度目にリュウベックの町を訪れたのは、二年後の87年春4月だった。この時は、春休みを利用してオランダから車を借りて東独のバルト海側を巡って来たその帰りだった。東独の美しい街シュヴェリン(Schwerin)から東西ドイツの国境の村ゼルムスドルフ(Selmsdorf)を通って西側へ抜けると、僅か数キロでリュウベックであった。そう戦後のリュウベックは東独との国境の町でもある。分断国家の悲哀を背負って来た町でもあるのだ。そう思うと、この街出身の政治家ブランド(Willy Brandt)が69年に初めて連邦首相になった時、東側との関係改善を図る『東方政策(Ost Politik)』に乗り出して行ったのも、よく解るような気がする。

西側へ出国するこの国境まで、初めての車での東独への旅は何の心配も無く、気抜けする程安全な旅だった。ところが、ここでは勝手が違い、車のトランクはおろか、ガソリントankの中までワイヤーを突っ込まれ、隠したものはないかと調べられた。私への扱いは丁重だったが、通過を許された時はほっとした。旅も終わりに近付き、結構疲労が溜まっていた。リュウベックは目と鼻の先だが、車もあることだし郊外に泊まって今夜はぐっすり休もう、そう決めた。アウトバーンを南へ行く所を北に向け、バルト海の見える海浜のリゾートに狙いをつけて走り出した。

小さな村への入り口を見付け針葉樹に囲まれたこぎれいな田舎の家並みを抜けると、灰色の光りに覆われた遠浅の浜辺が忽然と現れた。ティンメンドルファーシュトランド(Timmendorferstrand)という名の、美しい海辺の保養地だった。夕方だったので、既に十分空腹だった。浜辺のホテルを兼ねたレストランに入り、メニューにあったこの土地の名物『冷やした鱒のムニエル』を賞味した。大変おいしかった。店の人は季節外れにやってきたこの異邦人に親切だった。私はここが気に入って、結局二階の部屋で遠くに潮騒の音を聞きながら寝入ることになった。



写真4 夏のティンメンドルファーシュトランド

翌日はあいにく土曜日で、十分な土産を買うためには商店の空いている午前中までに、ハンブルクまで行かねばならなくなった。その日になって思い出したのだから、仕方がない。三度あの『ゴシックの街』を訪ねることは出来なくなった。

ところが、リュウベック西郊のアウトバーンを走っている時、ふと目を外に向けると、北国の空の地平に、あのマリア教会の、あのペトリ教会の、そしてあの大聖堂のレンガ壁の塔が、天空に向かって黒シルエットとなって林立しているのではないかと。遠く中世の時代、交易を求めて遠隔の商人がリュウベックを目指した時、初めて目にした光景をそれを私も今、見ているのだと感動したものだ。

その後もリュウベックへの旅は続いている。92年のライブツィヒ滞在の折にも鉄道で

出かけたし（既にベルリンの壁は崩れ、東西国境は撤去されていた）、2003年にもドイツ東部を訪ねた際、帰路ハンブルク空港へ向かう前に、この街に立ち寄った。日曜の朝、散歩に出ると、街の中心東側にも立派な聖堂が立っていた。中に入ると牧師さんが一人、来場者を待っている。しかし、午前10時を迎え至る所から教会の鐘の音が響いていると言うのに、誰も現れない。諦めきった表情の牧師を慰める訳でもなく、しばし世間話をした。ドイツ国民は所得の1割くらい教会税を払っている。そしてここで信者を待つ牧師はその費用で給与をまかなわれている。つまり準国家公務員と言うわけだ。この教会でもクリスマスの晩は大勢の信者が来訪するのだろう。しかし、世俗化の波は大教会が並び立つこの旧市街にもやって来て、こちらはそれに埋没しているようだった。

最後にこの街をこよなく愛した日本人画家、東山魁夷画伯の画集から、「北方の厳しさは私の心の支えであり、その抒情は私の心のやすらいである。リューベックの街の夜空に聳える教会の尖塔、近くの窓辺に漏れる燈火の暖かさ」と紹介された作品を添えてこの項を終わりにしよう。



写真5『窓明かり』東山魁夷